

日本研究の展望

——インドネシアをめぐる——

Bambang WIBAWARTA

日本学の位置付け

従来の日本についての研究は、対象が局所的であり、例えば日本の歴史なら歴史、文学なら文学の、しかも一時代の極めて限られた事柄に関して精密な研究をするという、いわゆる狭い専門的視野の上立った学問であった。換言すれば、日本の文化を総合的・統一的に研究する成果は未だ少ないのが現状なのである。

1980年代から90年代にかけて、インドネシアの日本学研究者の一部から文学・言語の領域のみならず、社会学分野での現代日本の社会問題や、経済学における日本経済の構造的変化と国際関係に力点を置いた研究が促進されてきた。この頃から日本への関心が高まり、90年代後半には日本研究の成果がそれに比例して次第に増加していった。

しかし、日本研究という名を掲げてはいるものの、確固としたディシプリンが想定されているわけではなく、未だ確立も定義もされていない。現在の研究は、従来のインドネシアの日本学が課題とした問題の延長線上にあると言えるのである。このような意味で、現在の日本学は、幅広い文化状況に関わる研究全般を指しており、限定された日本文化に関する研究ではなく日本をめぐる文化研究と言い表すことができる。この日本なるものをテーマにすること、あるいは日本なるものからテーマを発見し問題提起すること、そこに日本をめぐる文化研究の意義があるのである。

ここで重要なのは、近代日本において「日本」や「日本人」そして「日本文化」がどのように構築され、意味付けられ、解釈され、語られ、表象されてきたのか、そして日本や日本文化を語る学問・研究がどのように形成され流布されていったのかといった経緯を研究することである。それは、国際社会で通用する新しい日本学を構築するために不可欠な研究姿勢・方法論である。具体的には、「日本の中の異文化」に目を向け、日本文化を単一で均一のものに見ずに、その国際性・重層性・多様性に着目するという研究方法であると考えられる。

ネットワーク

インドネシアの多くの大学では主に日本語学コースが設置され、平行して日本の概要を紹介する程度の講義を設けている。しかし、独立した日本学科が置かれ、語学のほかに日本研究をテーマとする講義やセミナーが常設されている大学もある。それらの日本学講座は、伝統的に人文学分野の文献学的研究が中心であった。

現在、社会科学分野で日本研究に重点を置いているものもあるが、ほとんどは日本学科では

なく政治社会学部で行われている研究である。では、こうした傾向に対して、資料を提供する側の図書館にはどんな対応が準備できているのであろうか。研究の動向が変わったからといって大量に新しい分野の資料を購入することは現状では非常に困難であるのが実状である。ゆえに、図書館相互の協力をより充実させ、収集と利用の両面を合理化することが今後の課題となるであろう。一層広く深くなる研究への関心、増加し続ける資料の量、限られた予算などの現状を見れば、専門資料を扱う図書館の相互協力の必要性がいかに重要であるかが認識されるだろう。

また、インドネシアの日本研究では研究者数が多いにも関わらず出版された研究著書が全体として少なく、憂慮すべき現状となっている。こうした状況を好転させるためにも、図書資料ネットワークの整備が一つの重要な鍵となるであろう。インドネシアにおける日本研究と日本語教育が直面している一番大きな問題はやはり図書資料の不足であると考えられるのである。具体的な方法としては、それぞれの研究機関が持っている貴重なデータベースなどを有償あるいは無償でネットワーク上に公開し、データのネットワークを作っていかなければならない。また、国内外の研究機関・研究者とのネットワーク構築も必要になってくるであろう。

さらに、今日においては研究者個人の研究も重要だが、集団的なグループ研究がますます重要視される時代になってきている。しかも、より大きな研究テーマに取り組むために、学際的な研究の必要性がますます強調されている。そのため、研究プロジェクトを通して共同研究のネットワークを作ることも重要であろう。今後の日本学研究を発展させるために、より深化した研究に加えて一層正確な科学的研究方法が必要とされている。そのような研究成果を達成するために、さらに多くの人材を育成し、ハイレベルな人材を養成する教育も求められている。

例えば、インドネシアの日本研究を国際的水準に引き上げることを目的とした授業・セミナーなどが日本語で開催されなければならない。また、学生たちの関心が日本語学や日本文学に加えて日本の社会や歴史・文化といった幅広い対象に向けられているため、日本語・日本文学・日本文化・日本社会・日本史という五つの分野を中心とした内容に研究範囲を広げていくことが重要であろう。

グローバル化の中の日本学

人的交流が盛んになった今日は、まさにグローバル化時代を迎えている。地域研究がその地域の特色を他地域と比較しながら考察し、当該地域の文化・社会などについて広く研究する学問分野であるとすれば、日本学が日本のものだけとしてとどまる限り日本学の深化は見込めない。より多角的な視点とその交差が必要であり、そのためには世界で展開される日本学の研究交流が必要である。

グローバル化を目指す日本学は、その日本学の中心に日本が居続けることの重要性が薄れてきている。それに代りに、様々な視点から日本について研究がなされ、その成果を互いに学ぼう中で、今まで果たすことができなかった日本学研究の深化が期待できるのである。

海外と日本国内での研究動向にはやはり相違点がある。海外での日本研究は、その国の日本研究土壌の成熟とともに、自ずと研究の多様性または客観性が要求される。日本研究の対象と

方法は、社会・文化・歴史背景により形作られたと言ってよい。

学者はただ日本を研究していればよいわけではなく、自身の研究成果や知識を祖国の人々や学生に伝えなければいけない。外国人が日本を研究対象にする場合、日本人自身には却って気が付かない問題に気付くことがある。それは、外国人の一つの「特権」である。

国際化・グローバル化する社会条件の中で私たちが国家を越えるコミュニケーションを追求しようとするとき、お互いに何が共通するかをまず確認しあった上で、それぞれの相違から学ぶことが大切だと思われる。特性・異質性だけを強調するなら日本研究の本質は見えにくくなるだろう。

今後、日本・インドネシア関係の経済的側面の変化に伴い、両国の文化関係も大きく変わるだろう。その変化の具体例として、大学・学校における日本・インドネシア研究の振興、相互の社会・言語・文化・歴史・文学などを専攻する学生の増加が日本とインドネシア両国で見られるであろう。

日本語と日本学

学習する側にとっての日本学は、日本語運用能力と日本に関する一般的な基礎知識の両立を必要とするため負担が大きい。だが、広範な視野を獲得できるという大きな利点を備えているのも事実である。

社会教育の一環として行われる日本語教育機関での日本語学習者の学習目的には様々な理由があり一概には言えないが、最も求められているのは日本語で会話できるようになり、日本語で書かれた書物が読めるようになるという日本語運用能力を身につけることである。

インドネシアの日本学はもともと文献学から始まった。そのために、まず語学の学習が中心となっている。インドネシアにおける日本語教育は1950年代に学校教育以外の機関から始まり、60年代に大学・高校レベルでの日本語教育が開始された。そして、80年代に日本語教育機関や学習者数が飛躍的に増加した。89年には大学院レベルの教育が開設され、95年にはインドネシア最大の日本研究センター (Center for Japanese Studies) がインドネシア大学に設置された。因みに、インドネシア大学大学院日本地域研究科は、新たな現代的課題を中心として複数の専門的知を総合した研究・教育を行うことによって、インター・ディシプリナリーな領域を開拓していくことを期待され設置された研究組織である。

インドネシアの大学の日本学科では、一年生から徹底的に日本語を勉強しなければならない。まず語学を基礎にして、三年生より自分の志望した分野 (歴史・文学・文化・社会・言語など) を選び、卒業するために選んだ分野の卒論を書くことが一般的である。しかし、これについては大学ごとに違いがあり、単に日本語と日本文学だけを教える大学もある。

日本語関連の学科で勉強している学生は日本語の運用能力を養いつつ、日本語の使用者との円滑なコミュニケーションを目指し、日本語によって表現される思想・文芸・技術などの理解および摂取を目的としている。インドネシアでは最近、他の多くの国と同じように日本のアニメ・マンガ・J-POP、いわゆるポップ・カルチャーを通して日本語を学習する若者が多い。

インドネシアの日本語学習者の90%を高校生が占めている理由は、日本語が高校の第2外国

語選択科目に位置づけられているからである。また、近年、全国的に日本語専攻課程を開設する大学が増えている。

2006年国際交流基金の調査によると、インドネシアでの日本語学習者の学習目標は、小中高等教育の場合、次のようなものであった¹⁾。

日本の政治・経済・社会に関する知識を得るため
日本文化に関する知識を習得するため
将来の就職のため、あるいは日本語という言語そのものへの興味

大学の教養課程での日本語学習は短期大学(3年大学)のそれと同じく、日本語運用能力の涵養を目的とするのだが、教養を高めるという意味合いも強い。一方、専門学科での学習は日本語の運用能力を身に付けるだけでなく日本語そのものないし日本についての研究を目的としている。日本語の運用能力があればあらゆる分野で重宝がられるため、多くの学生は学部を卒業するとすぐに就職する。もちろん、中には大学院へ進学する学生も存在する。

社会教育の一環として行われる日本語教育機関での日本語学習者の学習目的は、様々な事情があるが、最大の目標は日本語を話し、日本語の書物を読むという日本語運用能力を身につけることである。

インドネシアでの日本語教育は1950年代に学校教育以外の機関から始まり、60年代には高等教育機関である大学・高校を中心に展開された。上述のように、80年代以降、高校での日本語教育が盛んになり、現在では学習者の最大多数は高校生である。大学の日本語・日本文学科・日本研究科・日本語教育学科および大学院の日本研究科において、専攻科目あるいは主要科目として日本語が教授されている。また、一般教養科目としては理学学部等に至るまで広く日本語が教授されている。その他、高等専門学校・各種学校等においても専攻科目・選択科目として日本語が教えられている。

日本学の普遍性

1986年にオーストラリアのPeter N. Daleが“The Myth of Japanese Uniqueness”(Croom Helm, 1986)という研究を発表した。これに拠れば、日本人の日本語論や日本文化論はすでに手の内を見抜かれてしまっているというのが、最近の海外における日本学の現状であると言える。

以前から日本人自身を含めて日本研究者の多くは、日本的な特徴などを見つける努力に熱心だった。日本における独自性を無視することはできないが、しかし独自性を大げさに強調することは危険である。「日本的」とされている伝統的なものの多くは、近代において作られ発明されたという議論があるが、これはその通りであるだろう。また、日本にも「普遍的」な要素があるということも無視することは出来ない。

日本研究者の多くは「日本的」という言葉を安易に使いがちである。その内容は、集団主義・タテ社会・曖昧さ・甘え思考等、さまざまな概念に及ぶ。しかし、こうした分析がどのような種類の「日本人」を観察することによって得られたか、という問題の検討はおろそかになって

いる。

それぞれの文化は必然的にユニークである。ユニークでない文化は世界中どこにもない。しかし、ユニークであることを真正面から振りかざして特殊性を論じる文化と、そうでない文化とを区別することが出来る。日本は明らかに前者に属する。「日本がユニークである」ということは日本のアイデンティティーの重要な命題の一つになっている。日本のユニークさ云々という場合の「日本」は、日本文化を指しているようでありながら日本国家をも指しているのである。日本と他国を比較するとき、このことは往々にして誤解を招いてきた。日本には特殊な面もあり、また他文化・他国家との共通面も持っている。日本文化が特殊であるのは自明である。しかし、全く同じ意味で世界中の文化もそれぞれ特殊である。つまり、それぞれの文化が特殊であるということは特殊性が普遍であるということでもある。だが、日本人の特殊性は、日本文化の特殊性を事ある毎に主張するところにある。

現代日本論には二つの枠組みがある。一つは、「日本的」なもの、日本のユニークさが存在するという前提に立ち、いわゆる「同化主義的」なアプローチを取るものである。もう一つは、国籍や民族的血統だけを基準とせず「日本人」を広く定義するものであり、マイノリティーやパートタイマーなど多様な集団の持つサブカルチャーの独自性と独立性を認め、その集積として日本文化を捉えながら日本文化をいわゆる「多文化主義」として考える視点である。

現在のインドネシアの研究者は、自分たちの社会が急激にマルチカルチュラリズムを受け入れる過程で育った。多民族・多文化社会としてあるインドネシアの日本研究者の間では、少し見方をずらせば日本社会もある種の「多文化社会」であるという観点が強固である。しかし、いわゆる日本人論者の多くは、このような問題意識と格闘することがなく、日本社会をモノカルチャー社会であると捉え、マイノリティー・カルチャーを「日本的」なものに定義に含んでない。

日本文学研究

現在は文学作品以上に日本の漫画が海外で大変な人気を博している。そうした日本あるいは海外のさまざまな情報は、インターネットや映画などで簡単に得ることができるようになった。しかし、国際交流の基本はフェース・トゥ・フェースであり、人と人が向かい合って直接話をするのが肝要である。それゆえに、交換留学生たちを交えた共同研究が重要になってくる。

また、日本文学がどのように外国文学あるいは世界文学と関係しているかということを考えることが大切である。川端康成や大江健三郎がノーベル賞を受けたことによって、日本文学は世界文学として認められていたと言えるだろう。そして現在、日本文学作品はさまざまな外国語に訳されている。例えば村上春樹・大江健三郎・夏目漱石・吉本ばなな、等である。

インドネシアでは日本文学関係の書物の翻訳は三十年以上前から行われているが、件数からみればそれほど多くはない。さらに問題なのは、それらの本のほとんどが直接日本語から訳されたのではなく、英語から重訳されたものであるということである。日本語から英語に、それからその英語バージョンからインドネシア語に翻訳されているので、日本語の意味・ニュアンスが変化する可能性が大きい。翻訳は言語だけでなく文化全般に渡って行われる行為であり、

いわゆる「文化の翻訳」である。そこに異文化の理解がなければ良い翻訳は生まれてこないはずである。

外国文学の読者はよく自国と他国を比較する。外国の作家を理解するために、自分の文化背景を元にそれを見る必要があるからだ。その外国の文化・思想などを明確にするためには比較するものが必要で、それは身近なもの・自分の文化・思想である場合が多い。この時、日本的な体験と西洋的な体験が違うことは言うまでもない。

日本文学を教える教員は日本語の能力は元より、その外に文学における法則・アプローチ・理論とそれと関係のある文化を理解しておかなければならない。日本語能力は作品を読むためだけでなく、従来の研究と作品に関係のある文献を読むためでもある。文学作品を読むにはもちろん翻訳本でもできるが、質の良い翻訳を選ばなければならない。そのために、できるだけ学生は原文を読むことを要求される。

大学院のレベル、特にインドネシア大学大学院日本地域研究科では日本文学を研究する学生が多い。多数の学生が明治から現代までの様々な作品を研究している。例えば、森鷗外・与謝野晶子・宮沢賢治・村上春樹・夏目漱石・島崎藤村・大江健三郎などを研究課題にしている。学部レベルではより多種多様な研究が行われている。例えば、歌舞伎・能・和歌・万葉集・井原西鶴などである。歌舞伎と能の研究では、テキストの他に音楽・コスチューム・舞台関係の研究も行われている。前期明治文学の研究には種々の困難があるが、特にテキスト読解の難しさが障害となる。古文あるいは漢文はもちろん、時代の背景・コンテキストの理解も難しく、全体的に理解しにくいのである。

外国語で発表された日本文学研究となると、従来は日本の側ではあまり高く評価されてこなかった。外国人に日本文学の神髄がわかるか、という風潮は今では大分少なくなったが、そのレベルはまだまだ低いものだと正面に向かい合って評価することを避けてきた傾向がある。しかし、日本文学は日本語によって成果が発表されるものに留まらず、多言語による理解がなされる時代となった。幅広い視野から、外国語で発表された日本文学関連の研究成果を収集・整理することも大切な課題である。

日本における日本文学研究においては、日本の研究者が自分たちにだけ通用する仲間内の読み方を後生大事に守っており、また、外国へ教えに出かけてゆく研究者も自分たちの読み方を「指導」という名目で押しつけに行くという意識から抜け出すことができないでいる。そのため、外国における日本文学研究が拓いたラディカルな視点や方法から取り残されようとしている状態である。これは依然として日本文学研究を日本中心主義的にしか考えられない体質が残っているためであるが、私たち外国人が行なっていることは、そうした体質に囲い込まれない別な関係を拓く一つの試みだと言えるだろう。

結びと今後の課題

海外における日本研究者の問題意識や研究方法の多様化も著しいものがある。海外の視点から日本研究を行うことにより、日本では気付かない日本文化や社会的特徴などの新たな魅力が明らかになることもあるだろう。

今後の課題としては、高等教育による研究者の育成体制を充実させること、独自の研究姿勢と立場を打ち出すことなどが挙げられる。さらには欧米や他のアジアの国々に見習って日本の古典から現代までの各分野の著書をインドネシア語に訳す作業も進められる必要がある。

日本文化の研究はここ数十年目覚ましい発展を見せているが、言語・文学・政治・経済などの分野に比べて、なおも多くの問題を抱えている。以下に、その主な問題点を挙げよう。

一つは、研究分野のアンバランスである。インドネシアの日本研究は日本文化への関心によって触発されたものが極めて多い。そのため日本文化の比較および交渉に関する研究が盛んに行なわれている反面、インドネシア独自の文化現象への関心ははなはだ薄いと云わざるを得ない。今後は歴史・文学・典籍・宗教だけでなく、哲学・思想・民俗・芸術などの分野で研究をより深くかつ広く進めていくことが必要であろう。また、先ほども挙げたとおり図書資料不足の問題もある。日本文化関係の研究図書はいまだ極度に欠乏している。日本文化の研究に欠かせない基本史料を完備した図書館でさえ稀である。ゆえに、インドネシアに居ながらにして十分な研究ができる環境を創るには、図書資料の充実が大前提であろう。

インドネシアにおける日本研究のさらなる発展を成し遂げるためには、大学の日本語・日本文学科に日本社会・文化諸分野の研究科目を今以上に取り入れ、日本学科では日本語教育を強化し日本関係の講座を増やし充実することが重要であると考えられる。

注

- 1) 2006年の国際交流基金の調査を参照。

参考文献

- 国際日本文化研究センター 1989 『「世界の中の日本研究」1, 日本研究のパラダイム』, 国際日本文化研究センター。
- 国際日本文化研究センター 1990 『「世界の中の日本研究」2, 対象と方法』, 国際日本文化研究センター。
- Fowler, Edward. "Reflections on Hegemony, Japanology, and Oppositional Criticism," *Journal of Japanese Studies*, volume 22, number 2, 1996.
- 浜口恵俊 1998 『日本研究言論』, 「関係体」としての日本人と日本社会, 有斐閣。
- Wibawarta, Bambang. 2004. "Japanese Literature Studies In Indonesia". International Symposium of "Globalization, Localization, and Japanese Studies In the Asia-Pacific Region. National Univ. of Singapore and Nichibunken.
- Wibawarta, Bambang. 2006. 「インドネシアにおける日本研究の現状」『INTERCULTURAL4—日本国際文化学会年報』特集ナショナリズム文化, アカデミア出版会。